

## は し が き

理科の学習では、自然の事物・現象を対象にした子どもの直接経験が極めて重要であります。それは、自然というものが、社会的な事象と違って、こちらからはたらきかけることによって初めて反応を示してくれるからです。また、子どもは、本来自然の中でどろんこになって遊び、物に触れ、行動しながら調べていくことを好むからであります。したがって、理科の学習の成立には、子どもが自然に接し、親しむ中で感覚を総動員させてはたらきかける活動が不可欠のこととなります。

昨今は、子どもの自然離れが問題になっています。生の自然から遠ざかり、人工的な物に目を向けていく子どもが増えているように思われます。みずみずしい感性の低下やあたたかい思いやりの心の欠如などは、このことと無関係ではないと思います。人間と自然とのかかわりは、豊かな人間性を育てるという面からきわめて重要であり、自然に感動する喜びを持たせる理科に寄せる期待は、ますます大きいと言えます。

自然に感動する喜びは、自然へのはたらきかけが子ども自身のものであり、自ら判断し行動していく主体的な活動によって生み出されたとき、それは一層強く深いものになると思います。したがって、理科の学習では、子ども自身が疑問や問題を見出し、自らの考えで、自らの方法で調べていく過程が重視されなければなりません。換言すれば、自然を対象に、子どもが自らの問題を解決していく過程が理科の学習の中心であると言えます。

そのためには、身近な自然をどのように教材化するか、子どもが問題を見つけ出す授業はどうあればよいかなど、教師の独創性や工夫が問われてきます。

当教育センターでは、数年前からこれらの考えを踏まえ、子どもと自然のかかわりを深める指導のあり方や身近な素材の教材化に取り組んできました。今年度も、以上の点に留意して研究を進め、その結果をまとめてみました。しかし、これらの報告の中には、引き続き研究を要する内容のものもあり、また、研究の進め方や結論の導き方に不十分なものもあるかと思いますので、率直なご指導とご批判をいただきたいと思います。

最後に、これらの研究にあたり、ご助言をいただいたり、授業研究の機会を与えてくださったりしました各位に対し、厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

新潟県立教育センター所長 宮 地 正 樹